

エドゥアール＝ジョセフ・ダンタン《人体からの型取り》について
—「芸術家のアトリエ」における「型取り」とその言説—

請田 義人 東京大学

「型取り」とは石膏などで対象の型を取り、その複製を生み出すプロセスのことである。この技法は機械的な作業によって容易に迫真性を得ることができるため、創造性を重視する近代芸術において、芸術性を欠く職人的なものと思なされた。これはロダンの《青銅時代》をめぐるスキャンダルにおいても明らかである。本発表では、この周縁的な「型取り」を敢えて中心的モチーフとして扱った絵画であるエドゥアール＝ジョセフ・ダンタン作《人体からの型取り》(1887)を取り上げ、その特異性を分析する。

画面に描かれているのは、二人の職人らしき男性によって裸体の女性モデルの脚から石膏の型がまさに取り外される瞬間である。本作についてはこれまでピュグマリオン神話と「型取り」との対照的な性格が簡単に示唆されてきたが、本論ではまずこれをより具体的に論じたい。そもそも同神話のイメージはダンタンが描いたその他のアトリエ画にも広く見られるものであり、またこの神話の19世紀における再解釈には本作と共通する性格が認められることも新たに指摘する。本作はアビランド社のオートウイユにあった製陶のアトリエを模していたが、その表現は特定の職業上のアトリエを意識させるものではない。ここでは一般的なアトリエ画において芸術家を顕彰するために用いられていた絵画的文法が踏襲されており、それにより匿名でプライベートなアトリエの印象が強められている。閉じられた空間、二人の制作者、画中後景に並べられた立体像、そしてとりわけ画面中央の裸体女性モデルの存在は、本作をいわゆる「芸術家のアトリエ」の方へと導きながら、画中人物とその職人的な行為までも顕彰する効果をもたらすのである。

その際とりわけ大きな役割を果たすモチーフは、背景に並べられた複数の立体像である。ふつうアトリエ画においては、画中モチーフは作者・像主による自己顕彰やオマージュに寄与する。後景には既に評価の確立していた《瀕死の奴隷》などの複製が置かれる一方で、当時「型取り」を用いて制作されたと議論されていたリール美術館の蠟製頭面部像や、この営みと密接に結び付けられながら再評価の過程にあった15世紀トスカーナの肖像彫刻の複製が配置されている。即ち、これらの像は従来の正統な彫刻史だけでなく、「型取り」へのオマージュとしても機能しているのである。

このように「型取り」を顕彰する本作は、従来のアトリエ画のパロディ的作品ともいえる。本作を論じた同時代批評においてもまた、女性モデルを時にヴィーナスなどと形容しながら、「型取り」を創造行為に見立てるような傾向があったことを指摘したい。同時期には印象派などの前衛画家たちが一定の評価を確立する段階にあり、アカデミズムの規範は弱体化していた。サロンでは様々な画題が通俗化の傾向を示す中、ダンタンは本作において職人性を大きく取り上げながら、近代的な芸術家像を重層的に描き出したのである。

(うけた・よしと)